公益財団法人　日本交通公社　出版物のご案内

■旅行年報2013　最新刊
直近一年間の旅行・観光市場にまつわるあらゆる出来事について、数多くのデータ・資料を基に分析。日本人の国内・海外旅行、外国人の訪日旅行、観光産業、国内観光地、観光政策など、さまざまな角度から旅行・観光市場の現状を一望できる一冊。二〇一三年十月発行。

■旅行者動向2013　最新刊
最新の旅行の実態や旅行者の意識に関する全国アンケート調査結果を、当財団独自のさまざまな切り口で分析。グラフや図表を多用して分かりやすく解説。政策立案や事業展開などに幅広く活用できるマーケティングデータ集。二〇一三年十一月発行。

■観光地経営の視点と実践　最新刊
観光地の持続的発展にとって、今や「観光地を経営する」という地域マネジメントの考え方が重要。本テキストは、既存観光地の現場で日々努力し、活躍されている方々が主な対象。「観光地経営」を「一定の方針（ビジョン）に基づいて、観光地を構成するさまざまな経営資源、推進主体をマネジメントするための一連の組織的活動」と定義し、八つの視点と十の実践例について、その考え方と展開手法を解説。当財団調査研究専門機関化五〇周年記念事業の一環として発刊。二〇一三年十二月発行（丸善出版）。

■機関誌『観光文化』220号
当財団が調査研究専門機関となって五〇周年を記念して、「観光研究の今日的課題とこれからを考える」を特集テーマに企画。わが国の二〇世紀初頭からの歴史のなかで国内経済の活性化に向けて観光が期待されてきたことを知り、観光研究の今後を考えるヒントを得ることができる一冊。二〇一四年一月発行（季刊一、四、七、十月）。

※当財団出版物のご注文はホームページからお願いします。
担当：公益財団法人日本交通公社 観光研究情報室
電話 03・5255・6073 http://www.jtb.or.jp

次号予告

当財団からのおしらせ

●当財団は「日本における観光資源の評価に関する研究」に長年取り組んできました。その成果を、調査研究専門機関として五〇周年を迎えたことを期に、写真集『美しき日本―旅の風光』として今年五月に出版します。次号の特集では、写真集の発刊を受けて、観光資源評価の枠組みや今日的評価の重点、加えて日本の美しさの根源などについて、それぞれの分野の研究者に執筆していただきます。

「2014年度シンポジウム・セミナー」

当財団主催の今年度シンポジウム・セミナーついてご案内します。

●観光地経営講座（仮称）　上期
これまでの「観光基礎講座」「観光実践講座」を統合し、二〇一三年十二月発刊の『観光地経営の視点と実践』（上記の「出版物のご案内」参照）をテキストにして、当財団のこれまでの研究成果・実績、地域との協働事業から創出される成功事例（プロセス）などを活用するプログラムで構成する予定です。

●旅行動向シンポジウム（仮称）　下期
当財団独自の旅行市場調査および観光政策に関する調査の研究成果発信の場として、財団研究員とゲストスピーカーが発表する予定です。
最新情報・詳細については、準備ができ次第、ホームページのインフォメーションでご案内させていただきます。
当財団ホームページ URL：http://www.jtb.or.jp

「研究員コラムの紹介」（二〇一三年十二月～二〇一四年二月）

行く先々で見て触れて、そして地元の人たちと語り、感じたこと。世相のなかに見た観光の未来像など、各研究員が独自の経験と視点を基にして、ホットな雑感を綴ります。当財団ホームページ「研究員コラム」に掲載した三カ月分をご紹介します。

203　二〇一三年の「観光研究」を振り返る
　　～日本観光研究学会を例にして――（梅川智也）
204　年頭コラム「美しき日本」――（寺崎竜雄）
205　まちづくりと観光事業の間にある壁①――（後藤健太郎）
206　自然の利用は無料か？――（五木田玲子）
207　指標を活用した持続的な観光地の管理・運営――（清水雄一）
208　「現代アート」を活用した観光地づくりとは――（高崎恵子）

当財団ホームページURL　http://www.jtb.or.jp/　研究員コラム一覧　で検索

編集後記

◆前号220号では、「観光研究の今日的課題とこれからを考える」を特集テーマにして、わが国の観光をめぐる動きや研究の経緯、現在そして今後の課題について考察しました。今号では、国内の観光研究が海外の学術界でどのような状況にあるか、観光研究と他の学問領域とがどう関連するのかを取り上げました。

◆国内外で研究活動されている方々から、観光研究を取り巻く状況について、角度を変えた忌憚（きたん）のない論考をお寄せいただきました。観光研究という学問領域が他の領域と相互に関連し合っていて、いろいろな切り口からの研究が可能であることが分かりました。わが国における観光研究は今後どのような展開をしていくのでしょうか。

◆国内での観光研究の成果が普遍的であり、世界の国・地域にも有用であると示されることが今後は求められるのでしょうか。より多くの日本の観光研究者が海外に向けて積極的に情報発信することを期待しているとの巻頭言は、ピザム氏からの興味深いメッセージでした。

◆当財団研究員が取り組む「自主研究」の報告に加えて、「観光研究レビュー」を新たにスタートさせました。「ツーリズム分野における国際学術誌の現状①」では、どのような学術誌があるかが整理されました。国内外の観光に関する研究活動の情報収集と分析そして評価などを整理して随時掲載します。観光を研究対象とされている読者の皆様に参考になる誌面を目指してまいります。
（片桐）

観光文化編集室メールアドレス：
kankoubunka@jtb.or.jp

観光文化221号やバックナンバーをPDFで閲覧できます。観光文化最新号　で検索